

グローバルCOEプログラム

タイ・マヒドン大学理学部および環境資源科学部との学術交流協定締結 大学院生活健康科学研究科/薬学研究科（2010年3月5日）

大学院生活健康科学研究科 研究科長/教授 小林裕和、専攻長/教授 横越英彦、副専攻長/准教授 雨谷敬史
薬学部・薬学研究科 教授 野口博司、事務局COEスタッフ 野島百合子

中部国際空港より、空路6時間で真夏のタイ・スワンナプーム国際空港へ到着した。空港から車で約1時間、バンコク市内は昨年2月に訪問した時よりも更に近代的な都市となっていた。

今回の訪問の第一目的は、昨年のマヒドン大学理学部および環境資源科学部への訪問において、学術交流協定の締結に向けて着手することの合意を得、その後調整を進めてきた協定を締結することであった。理学部とは本学の大学院生活健康科学研究科および薬学研究科が、環境資源科学部とは大学院生活健康科学研究科が、それぞれ教育連携や学術研究推進のための部局間協定を締結した。また、個々の研究者を訪問し、各学部、研究所の代表者と共同研究に向けた打ち合わせや本COE拠点における交流事業の推進に向けた打ち合わせを実施した。

マヒドン大学は、バンコク市内等に4つのキャンパスを持ち、17学部、7附属研究機関、その他国際教育機関等を有し、学部学生約15,500名、大学院学生約8,300名が在籍するタイ屈指の名門大学である。タイの近代医学、健康の父と謳われるMahidol of Songklaに因んだ国立大学で、特に医学系の重点大学として、その教育の中心的存在である。今回訪問した理学部は、バンコク市内Phayathaiキャンパスにあり、歴史的な建物の中に最新鋭の設備が整っていたのが印象的であった。他方、環境資源科学部および栄養科学研究所は理学部から車で1時間程離れたナコーンパトム県Salayaキャンパスにあり、210ヘクタールの広大な緑豊かな敷地の中にある。

理学部には、約300名の教員、500名のTA等の若手研究者や学部職員と博士課程学生409名、修士課程学生687名、学部学生975名が在籍している。マヒドン大学理学部は、内容的に日本のそれとは大きく異なっており、12学科（解剖学科、生化学科、生物学科、バイオテクノロジー学科、化学科、数学科、微生物学科、病理生物学科、薬理学科、物理学科、生

理学科、植物科学科）から構成されている。全ての大学院講義が英語で実施されている点は注目に値する。研究活動も非常に活発で、同学部から国際学術雑誌への掲載論文数がタイ国内の全発表論文数の50%にも及ぶという驚くべき数字がそれを物語っている。協定締結式には、理学部長Skorn Mongkolsuk博士他20名の代表者が参列した。相互に自己紹介をし、各々の紹介DVDにより活動説明を行った。協定書への調印後、今後の両研究科や本拠点との連携や交流の推進等も含めた具体的な意見交換ができた。また、各学科の研究施設の見学では、個々の研究内容について討論し、中には共同研究への発展が見込まれる研究課題もあった。学部長主催の昼食会では学部内の調理場より温かい食事や冷たいデザートが給仕され、猛暑の中、和んだ一時を過ごすことができた。

環境資源科学部には9つあるコースに411名の学生が所属しており、52名の教員と45名の職員が配属されている。国際機関等からの援助が年々増加していることで人的・物的資源が強化され、研究内容の充実や成果の国民への反映が進みつつあるとのことである。部局間協定締結式には、環境資源科学部長Sittipong Dilokwanich 博士他7名が参列した。相互の活動を説明した後、本学環境科学研究所の概要および研究内容等について説明した。協定書への調印の後、大学院生活健康科学研究科、環境科学研究所、本拠点との連携や交流の推進に加えて、複数の学術国際会議の共同開催等、具体的に意見交換した。研究室や施設を見学した際には学生との話しも弾み、限られた時間の中で多くの交流ができた。

栄養科学研究所には、教員および研究者56名、大学院学生37名、サポートスタッフ130名が在籍している。お互いの研究を紹介するとともに、今後の連携について意見交換をした。さらに、研究室見学、JICAの協力で運営されている水を作る施設や学生が実習するための施設等を見学する機会を得た。



協定締結後の記念撮影
(前列左から3人目がSkorn Mongkolsuk学部長)



マヒドン大学理学部前にて



協定締結後の記念撮影
(中央左がSittipong Dilokwanich学部長)